

タカクラ・テル聴き取り記録

山野 晴雄

この「タカクラ・テル聴き取り記録」は、生前、タカクラ・テル氏から聴き取りをしたときのノート
のメモである。タカクラ氏には録音ができなかったので、メモを参考までに紹介することとした。

なお、聴き取りのさいには長男の高倉太郎氏が付き添っていたので、太郎氏の発言もメモされてい
る。また、補足資料として「高倉太郎聴き取り記録」も収録した。

○ 1980年9月20日

・越後川口～医者 自由大学をつくりたいと、100人くらいの会員をつくった。死亡して立ち消えに
なった。

・京都大学で人道主義の流れにふれた。
河上さんから多少の影響を受けて、のちに大きな役割をする。

↓

農民運動と労働運動との関係ができる。
いやおうでも勉強を始めざるをえなかった。

長野に住んだこと、自由大学 ― 農民運動と結びついた。

・京大～プーシキン、ゴーゴリ、チェホフ の影響を受けた。

「蒼空」～事実をそのまま記した。

山口茂一

新村先生が残れと言って残して、やめるとき一番反対した。

京大をやめる理由～私の身の回りの上で一番大きなこと

「女人焚殺」なんかがわりあい好評で、「蒼空」の出版の約束もできていた。

改造も原稿を断るし、みんなボイコットをくった。

当時、新思潮（菊池寛）

新村さんは、物を書きながら研究することを望んでいた。

人生に対する迷いがあって、大学で学問することを否定し、新村さんが外国に行っ
ている間に、大学をやめてしまう。

「ニッポン語」が出たとき、新村さんが大阪のNHKで紹介した。

・長野に行った。

結婚の話が決まっていた。

父が死んだり、大学をやめたりで、結婚したときにはほとんど食えなかった。

そのとき私を支えてくれていたのは、

アルス（北原白秋の弟）

都新聞（上泉～文壇のセクト主義に反対する）

大正12年 出産の前々日に沓掛から別所に移る

(信)

・プロレタリア文学

「蟹工船」「不在地主」を農民に読ませると、「大変面白かった」と言うけれど、「あまりよく読んでいない」。

- ・かながふってあるのとふっていないことのちがい
小学校しか出ていない
かなふりの層に向けて物を書かなくてはならないと考えた。
こっちから近づかなくてはならないという態度が、その後の私の態度になる。

・三高

大阪・京都の富裕な人が多い。

平田禿木（英語の先生）～日本語が大変うまかった。

↓

長野県の農村に入ると、農民のことばで話をしなくてはならない。

・「阪」

ほとんど事実。

色町には出入りができなかった。

友人が芸者と熱くなっていた。友達が結婚して、病気になる。

私が芸者の置屋に行った（見舞っていた）。

□村～祇園に入り浸っていた。呼ばれたとがある。

半年のうち、祇園の裏を知っている。

・ヒューマニズムの影響が大きかった時期

ゴーゴリ、チェホフ

「新しき村」に対しては反発していた。

個人の道楽

全体的な農民の解放を考えなくてはならない

山宣と話し合ったことがある —— 有島武郎の農場解放

有島に対する反感を持っていた。

有島の細君が亡くなってから、有島に対するインテリの同情が集まる。

有島に2人 山路ヤエ子（女優）に対する有島の態度に反感をもった。

北陸の代議士の細君

結婚をしないで惹きつけてもてあそんでいる。

「宣言一つ」には

はったりが多い。作家の特権を振りまわす点があった。はったりがあった。遂にウソをついていると思った。

・昭和2年 浦里 神科 古里農民組合

農民組合の相談を受ける。

農民から農民闘争の援助を受ける。

最初は私は嫌だった。農民の信頼と不信頼が重なることがあって、信頼が不信頼をうちこらしめていく。

・昭和3年 上小農民組合

「農民は永遠である」 不完全なマルクス主義者。

・「高瀬川」 大体事実のまま。腐敗した支配層。

- ・「百姓の唄」 小海町～小山邦太郎の工場。実際にあった話。
- ・「狼」 あのころ、非合法の組織と接触していた。
 鷲見京一などが 4.16 事件で捕まった。
 諏訪で繊維方面を組織してきた連中がひそかに私の所へ来て、援助した。
 諏訪その他で争議が起こると
 女工～年期・半期の約束
 女工を工場で組織しているのが欠点
 農村で女工を組織して切られたら、次を送り込んでいく。
 →女工委員会(タカクラさんの提唱による)
- ・昭和 10 年 東京へ出てすぐ ローマ字会 田中館愛橘 (会長)
 国語協会 近衛文麿
 当局の監視 転向したものの、認めていなかった。
- ・久保田農場
 でっちあげ。
 農場で研究会 (農業問題について 左翼的) を開いていた。
 関口竜夫 (茨城)
 特高はタネがなくなっていた。
- ・ゾルゲ事件
 宮城与徳は私のところへ来た。交際があった。
 宮城の要求にしたがって、あの運動を助けることはしなかった。
 コミンテルンの人であることは知っていた。宮城に対する信頼があれば、もっと深く結びついて
 いたかもしれない。
 しかし、ことわった。
 このことを知っていながら当局に知らせなかったことで、きつく調べられた。1 か月調べて釈放。
 更新会 (小林杜人)
 松本三益も訪ねてきた
 関係ないということを当局に言った。
- ・自由大学
 不況のときに、自由大学のあり方も変わらざるえない。
 不況に対する要求が出てくる。
 「経済学史」
 実際には自由大学の運動
 どうやっていいのか、かれらが解決できるか
 社会運動の方にうちこまざるをえなくなった。
 自由大学の方針を明確に立てえなかった。
- ・別所
 斉藤勇雄 (村長)
 リンゴを植えたら、とって、やった。いま財源になっている。
 常楽寺の下に託児所。

・戦後の自由大学

戦後のどさくさに紛れてやったことがいけない。
準備をしないで、明確な方針をたてなかった。

運動として自由大学をつかうしかない。統一戦線の機関として学習。

大内兵衛「帝国主義論」 評判はわるかった。
大学の講義でもなく、通俗の講義でもない。

平野義太郎

戦前の人が続いていた。
中心は小宮山量平

私 ほとんどタッチできなかった。
農民委員会
党組織を作ること
選挙

・自由大学の文章

生活のための学習ではなく、原則的な学習を身につけること。

日本民族史

唯物史観

農民の生活にふれている
労働者（女工）の生活にふれている ことからくる。

ツウ 女工委員会で、女工に料理と裁縫を教える
正月と盆に帰ってくるときに、それを教える

女工委員会 別所、西塩田につくられる
農民組合に婦人が参加してくる。
これがなかったら、西塩田小作争議は勝てなかった。

○ 1980年11月22日

・京都時代

長野時代 思想的に変化するきっかけになった。
活動の変化がある。
京都時代、長野時代を貫いているのに、言語問題がある。

・影響を受けた人

新村出さん～新村さんの推薦で京都大学に残る。
結びつきは言語学であって、ふつうの抽象的な言語学ではなくて、日本の言語学だった。
新村さんもある期待をもっていただいよう、京都の市長選挙で何年ぶりかで会ったとき、広辞苑ができたときで、「君がいてくれたら、君に援助してもらったのに」と。
「ニッポン語」をNHKの大阪放送でほめている。
新村さんから学んだ言語学は、一生、影響を受けた。
明治の自由民権運動のあと、明治30年代、東京大学の上田万年を中心にストリー

ムショックがおこる。言語学の中心になって、日本の言語学を打ち立てようと努力する。

みんながそれぞれ分担したしたところが権威となっている。

新村出
金田一京助
東条操
柳田国男

共通の欠点がある。日本の言語学界を前進させようとしなかった。

・東京に出てきてから、文化運動の人たちとの関係ができた。

滝野川時代 カナモジカイ

ローマ字会 田中館愛橘

ローマ字会の除名にされそうになったとき、頑張ってくれた。

国語協会 近衛文麿が会長 理事をやった

カナモジカイ、ローマ字会が一緒になって国語協会をつくる。

昭和 14 年 6 月

黒滝～国語協会の仲間であった。

大島義夫 (エスペラント)

人民戦線派ということで検挙された。

古在由重、岡邦雄

当局～根こそぎ挙げてしまったので、特高のタネがなくなった。

新劇 千田是也、東野英次郎も捕らえられた。

党に足りないものがある。不満をもっていた。

インテリゲンチャ

はじめは進歩的な意味をもっていた。社会を推し進める要素となっていた。

労働者の中からできた、いままでのインテリゲンチャとは違うインテリ。

↓

2つの要素がいる。

理論的に進歩的

大衆の中に伝わって、大衆を組織する。

2つが欠けてはいけない。

農民が農民闘争に参加しているかは、小作料が払えないという欲情から始まる。

↓

大きな闘争ができたのは、小作料をまけてもらうのは当然の運動。

しかし同時に、小作料の減免要求が社会の進歩につながるという意識がある。

弾圧されたときも崩れないようにした。

自由大学に来た連中が農民組合に影響を与える。

インテリゲンチャ的要素が少し働いた。

理論と組織が一緒になる。

・浦里

別所温泉に行って 2、3 年後に、京都大学にいたという文学に興味を持っていた人が近づいてきた。

農民でなく農民組合でない。ラッパ吹き。

のちに別所の農民組合員になる。

その最初の仕事が女工委員会 (昭和 7 年)。

ある歴史的な意義をもっているのは、不景気になると、盆・暮れに給金をもらって国に帰る。不景気になってただ帰ってくる。それに反抗する女工は次の年は雇われない。どうするか？工場に女工を組織しても首になる。女工を農村で教育して組織する必要がある。（タカクラの提案）別所に帰ってきた女工たちに、家にいるうちに、料理・裁縫を教える。
ツウが農村向きの料理を教える。

次いで西塩田につくる。

党のオルグ（浜春雄）がやってきて、その話をしたら、プロフィンテルンの機関誌に載った。

女工委員会を組織し、内部の組織者となった。

農業史の学習会をやった。

封建時代、資本主義の時代に農民はどうだったか。

大原幽学、箱根用水が出てくる。農民の援助でできた学問。

・転向

共産党に入っている者が共産党の方針を捨てるというのが転向。

終戦後、徳球の勧めで入党した。

入党するまでに獄中生活をした。

伊東三郎 私のところにも来ているし、東京でも会っている。

大泉兼蔵 東京で会っている。

・徳球

（共産党に）入っている、と言った。

真の共産主義者。（党の理論、組織活動が統一されたときでない共産党にならない）

戦後、入党する。昭和20年10月。志賀義雄と松本一三の紹介。

徳球、志賀とは戦前、会っていない。

・ゾルゲ事件

宮城与徳～松本三益の紹介できた。アメリカから帰った画家としてきた。私も興味をもつて会った。滝野川で貧乏していた。ごちそうしたいからといってよばれる。主婦の手でごちそうになる。

はじめたんなる絵かきだといったのが、思想的な話になり、ソ連のスパイ機関に参加してもらいたいと言われた。

しかし、私が見てみると、生活がみだれている。家にいる未亡人との関係も正しくないことがすぐにわかった。安田のところにも近づいていて、安田の話によると、梅毒などで治療を受けている。それほど重要な仕事をしている人が生活が乱れているのでは適当でないと、断りました。

断ったのちも、神奈川県にも訪ねて来た。

久津見が捕まり、安田が捕まる。

タカクラさんの名前も出ているから、と久津見の娘から言われた（伝えられた）。

真栄田三益に相談したら、三益から交友関係がないと言った方がよいと。

↓

交友関係がないと警視庁に行った（自首）。

1か月とめられた。

宮城も断られたと言っているのだから、認められ、釈放となった。

高橋貞樹

私の農民運動の弟子のような時代があった。
高橋が捕まると、救援をした。

真栄田に対する疑惑はもっている。
安田に、この事件は非常に複雑な事件だから、誰も信用できない、と言ったことがある。

真栄田がつかまらない。
宮城与徳と接触し、私（タカクラ）に紹介したのも彼である。
当局から聴かれないのは不利だとは思う。
三益に対する不信から、宮城に対して用心しないといけない、と言ったことはある（安田に）。

真栄田三益
守屋典郎を指導していたとき、真栄田が長野に来た。
真栄田の上司が伊東。

久津見が私の家で宮城と会った。

・松本連隊長
テルの知り合い。

・上田進
ロシア文学者。（尾崎家）
テルはあまり親交がない。

秋田雨雀の娘～戦後、十和田湖で自殺（北園高校）。

○ 1981 年 8 月 26 日

・三高時代
大学卒業してからものを書き始めた。
臆病というのか慎重というのか、用心深かった。
一般的に言えば、自分たちは低い、コンプレックスがあるような感じだった。

・新村出追悼文集
『美意延年』
（書き入れ部分）175 頁「研究すれば、（もとより『広辞苑』の内容を見ただけで）すぐわかることとです」

・成瀬無極
ドイツ語、父は成瀬大白（幕府お抱えの画家）。

・島文次郎
野口さよの兄。野口寧齋の弟。
野口事件～明治時代に子どものお尻の肉を切り取った。ライ病。

（高倉太郎氏メモ）

・荷風と鷗外について
荷風
フランス留学中にドレフェス事件（ゾラ）にぶつかる。

ニッポンに自然主義を実現しようとして帰国したが、幸徳事件にあつて、絶望。
戯作者の道をえらぶ。作品「花火」をよめ。
尊敬する2人の人物（森鷗外、上田敏）

鷗外

反共でありながら、幸徳事件の弁護を平山修のためにマルクス主義の資料をぜんぶ貸し与える。（古泉千樞がタカクラ・テルにトランプをやりながら話した話）

古泉千樞（1886～1927）

伊藤左千夫の門に入り、1908（M41）「アララギ」創刊に参加。

・正受老人

正受老人の紹介については、いままでになかったのではないか。

・思温荘

別所の家のこと。

私が京都にいて、清水に住んでいたことがある。一人の書家が住んでいて、幾人かが弟子になって、書を教わったことがある。「篆刻」を教わった。教わった人に号をつけたが、孔子の論語かも知れない。「君子に十思あり」というのがある。「……温恩」というのがあり、「思温」という号をもらった。住んでいたところを「思温荘」と使った。

・友

日ソ文化協会

「友の会」の会員ではあった。子どもの名前の「友」は、それでつけた。

・風見章

私の書いたものに関心を持っていた。

信毎の主筆になるとともに顧問にする。顧問料をもらった。その関係で文章を書いた。

東京に追放されてからも、しょっちゅう連絡があった。

終戦後、風見が左翼的になったとき、徳球さんと相談した。民主勢力に影響力を持っている人だから、そういうほうの民主勢力を左翼的になる、統合する方に力を貸してもらいたい、と言ったことがある。社会党の中で影響を与える方となった。それから彼とは近しくしていた。

（共産党の中で一番近しくしていたのは私だけではないか）

外国亡命時にも、北京に来たことがある。風見－西園寺－タカクラの関係ができています。

・「国民思想」

小林杜人に「書かされた」。あたりさわりのないように書いた。

（高倉太郎氏メモ）

・「蒼空」

ヴェラスケス－須田国太郎（えかき、1年後輩）

ベルグソン－山内得立（1年先輩）

「阪」

栗原教授－厨川白村

早川教授－成瀬無極

木村－中村直勝（神主の家、20代で白髪）肉食をしなかった。

木村の指導教授－三浦周行

木村をなぐった人－高山義三（囑託）

岡田助教授－上林（高倉の親戚にあたる）京大教授

坂井－山内義雄

（高倉太郎氏メモ）

・三高の同級生

中村直勝、久松真一（認識論）、沢瀉久孝（万葉）、大庭米次郎（ドイツ語）、那汲利貞（中国文学）、木谷義七郎（仲がよかった。義太夫を教わった。木谷蓬吟の弟、東大卒後死亡）

教師

成瀬無極（ドイツ語）、茅野肅（ドイツ語）、橋本青雨（ドイツ語）、小牧暮湖（ドイツ語）、厨川白村（英語）、島文次郎（英語）、平田禿木（英語）

三高教師

林森太郎 国文学（文学士）「有職故実」「落窪物語」「源氏物語」

坂口 国文学

大野 漢文 あだ名シャンマンテン「霜満天」

（高倉太郎氏のメモ）

・米田庄太郎

部落出身。どうしても教授になれない。

教授になる官位あがって行って高等官2等（親任官）になると、天皇の前に出なければならぬ。このためいつまでも講師であったため、高田（保馬）も出世できなかった。そのため大学当局は、最後には米田を教授・文博にして直ちに休職処分にした。おかげで高田は教授・博士になることができた。

・本居宣長

非常に果たした役割と害毒がある。

かみがかりはわるいという点で科学的分析をした。

えとゑはちがうことをちがうと発見したことなど。

戦後、何かに引用したことがある。

・陳明倫さん

中国の反戦兵士の殺されたところを案内してもらった。

・大沢三郎

ダイヤモンド社に大沢三郎（郡会議員）がいて、大原幽学を載せた。

これが転機でダイヤモンド社をやめて、大沢は労働組合運動に入る。

・大衆の中へ入る道を教わったのは自由大学の連中からだった。

大変得をしている。

・文壇ボイコット

女性に原稿を出していたのを断ってき、改造から断ってくる。

そのときに女性へ、私は厨川白村に報告したら、いまは派閥がある文壇だ。新しいところへ紹介しようと言って、紹介したのが白秋。東京へ出て、白秋に会い、アルスを紹介してもらい、アルスから出る。

大阪朝日

薄田泣菫の名で出ている。

「芥川が僕を嫌った」とだれかにあとで聞いた。（恒藤か？）

文壇からボイコット。邪魔者にされたということでしょう。

アルスから出したことが得をした。無駄なものを書かなくてすんだこと、長野の農民・労働者の生活に触れて学んだ。農業問題なんかを具体的に学んだ。

○ 1981 年 11 月 21 日

・尾崎家

蕨岡（中村市） 農民。

そこから医学校に行き、中村で開業。宇和島へ移って眼医者をやっていた。

秋水と美弥の関係

私の家（小谷）の一族と秋水（中村市）とは古い前からの親戚があつて、宴会・法事などには呼ばれる関係があつた。

秋水の母親と美弥と結びつきがあつた。

母は秋水の母のもとで裁縫などを教わつた。

秋水と母（美弥）～川にカニを取りに行つて食べたことがある。秋水はカニが好きであつたと言つていた。

・小谷家

代々医者であつた。大きな石碑が並んでいる。

輝房（父）～高知医学校を中退。

医者の子の長男は免状がもらえた。

次男はもらえないので高知の医学校に通つた。

長男は少し頭の弱い人だつた。次男の輝房は高倉へ養子に行く。

もらうべき財産一兄がまったくくれなかつた。畑を2つくらいもらった。

祖父（兼吉）一長崎で修業した。死んだときは暮らしはよかつた。

謙吉は母親の石碑は建っていない。墓があるだけ。

浮鞭に墓はある。

・生い立ち

満1歳のとき、七郷村の家から、誕生の餅を重箱を持って歩いた。うわさの種になっていた。

小学校～小学校が建っていないので、天神様の中で教わつた。

中学校～叔父 ランプの掃除などをした。

肺結核になって、何人も死んだ。女工が「不如帰」を読んでいた。

「思い出の記」、「不如帰」、漱石～中学3年のころに読んだ。

子どものときには、父が自由党の運動をしたことがある。

掛け軸 板垣、星、松田正久の肖像があつた。

お祭りの旗に「自由民権」などの旗があつた。

普通の子より大きかつた。代議士になると言っていた（2～3歳のころ）

・三高

芦花「思い出の記」の苦学をしたい…と何十回と読んだ、

・京大

杏村～ロシア語講座で知り合う。

東京師範から来た。—— 高等学校との気風ととけあわなかつた。（杏村もその1人であつた）

高師と高等学校との違いがあつた。

作風としてずっとマルクス主義に行けない、かたくななところ

ろがあった。

大学院の講義を聴く。
主任教授 新村出

京大を卒業した年に 経済学は法科大学の中にあった。
国際法律研究所ができる（国際的な法律を統一的に研究する）
跡部定次郎（フランス語）が主任教授
各国から集めた本を整理
ドイツ語、フランス語、ロシア語などができるのは法科にいない。
そこでいろいろな言葉をやるので、新村先生から話があって、高倉が
囑託として入る。月 30 円もらう。
隣の部屋が河上肇で知り合うことになる。

チフスは間違い。
やったが、これが学校が遅れた原因ではない。
英語の教師（シェイクスピアの講義） 「出席日数が足りない」ということで落第
英国人教師（講師） になる。

卒論 アイルランドの文学（グレゴリー）を取り扱った。
島文治郎、上田敏
グレゴリーの作品を全部読んでいるということをはめられた。

バリモントの来日
バリモントに直接会ったことはない。
署名した本は京都大学にある（現在）
バリモントの友人と親しかった。
↓
山口茂一先生の友人
新村先生が、詩と訳は日本語の詩になっている、とほめた。
（上田敏の訳は日本語の詩になっていない）

「蒙古文典」 山口先生の訳は日本語になっていない。終いの方は私たちが訳した。

京都大時代 文科の会合で花やしきへ行った。

・関口泰

1920.3.1 手紙
新村出のいとこ
朝日の記者 親しくしていた
朝日と仲がよかった～大山郁夫、長谷川如是閑（大阪）
白虹事件（大阪朝日）
↓
「我等」の創刊号で「砂丘」を書くことになる。

大山郁夫 次男が早大に入る
女房が酒一升を持って大山さんのところへ行った。

大西としお（演劇研究会の仲間の 1 人、1 年先輩）～松竹に入る（文楽の責任者）

・結婚

三三九度などはやめようではないか。
一緒に食事をして、山宣がY談をやって終わった。

星野温泉に落ち着く。

・京都

銀閣寺の入口

長くいたのが清水

乙女の滝の南にある茶店「滝の家」の料理屋

2軒のうち1軒を借りる 二間、玄関 滝の家から食事を運んでもらった

大学に通う

→「阪」はこのときのことを書いている。

「阪」～京都時代の懺悔録、という意味。

長野で農民と接するようになる。純粹に学問のために通っていた時代の、恥ずべき生活の記録。

・信（長女）

大正 12.9.27

別所の小学校。小4のとき追放になる。

東京の滝野川第2小学校に転校。

平塚女学校に行く。神奈川の二宮に越す。

理学専門学校（蒲田）2年

帝国女子医学専門学校に付随して出来たもの。

→帝国女子医学専門学校に転学

医者の免状をもらう

佐久病院（若月）にインターンに行く。

立川の民主診療所の第1号の医者となる。（1948年ころ）

三鷹の上連雀で開業。

・太郎（長男）

大正 14.9.29 生

別所で生まれる。病院（上田）

別所の小学校。2年まで。追放。

滝野川第2小学校へ転校。小学校4年 国府小学校→1年以内で大磯に移転 大磯小学校へ

湘南中学（現在湘南高）

苦痛な思い出がある。中4のとき結核で1年求学した。ノイローゼになる。

戦争のどさくさに紛れて理科へ行く（徴兵逃れ）

獣医畜産学校へ行く（1学期で終わる）

（横浜市立大の前身に受かったが行かず）

空襲で大磯の家が焼ける。

亜炭の事務所に勤める。

父 代議士で秘書をした。（カバン持ちをした）

岩波 露日辞典 ロシア語改訂

ロシア語を勉強し、少し読めるようになった。

弟さんが早大ロシア文学科に入った。

・房（次女）

1928.2.9

理学専門学校を卒業。疎開して津田沼へ行った。
代議士荻田アサノの秘書をした。
党本部に勤めていた秋山茂 結婚 横浜に住んでいる。

・次郎

29.9.9 ~ 31.5.1

死んだとき作った俳句 (テル) 「死んだ日に大デモを行って 行く春惜しむ間もなしときの声」

・友

31.10.31 ~ 32.2.25

・三郎 (三男)

33.2.3 ~

別所で生まれる。

小学校—大磯

中学—湘南中学 (1年いた)

上田中学へ転校

↓

早大の露文科 山本薩夫を慕い、黒田辰男のところへ酒を持っていき、入交先生にお願いして、入れてもらった。

野崎先生 (演劇) のもとで、エーゼンシュタインのモンタージュ論を卒論にした。

山本薩夫の弟子になり、助監督になり、現在プロデューサーになっている。

・秋田雨雀との関係

秋田の娘 肺病の薬を高倉が持って行っていった。これで娘が助かった。(大磯の時代)

京都にいたとき、「カチューシャ」(須磨子、抱月) 大阪に来る

京都大の演劇研究会の理事をしていたとき、大阪で公演するとき援助した。

雨雀が弁当を持って出て来た。→これから仲良くなる。

・高橋貞樹

原稿 (歴史の原稿) を送ってきて、見てくれ。

意見を付して返した。

手紙の往復があった。

滝野川時代 ロシアへ行って帰ってきて捕まり、刑務所から手紙が来る。

高倉が、世話をする人がいないので、差し入れをする責任者となる。

高橋の救援会の事務所になる。

お母さんが一度訪ねて来たことがある。

「特殊部落一千年史」(世界文庫) に高倉の名が出ている。

・西田幾多郎

最後に捕まったときの手紙が残っている。

・森鷗外

会いに行ったが、いなかった。

嘱託になってから、「アショカ王」の引用をしてもいいか、手紙をだした。

・永井荷風

たくさん手紙があった。

荷風の「腕くらべ」の装幀を直して書いてもらった。

ある作家の系統を代表する作家だと思う。

ヨーロッパにおけるリベラリストなどところがある。ハイカラであるが国際的、日本的たろうとした。

・関口竜夫

農業研究者。北佐久。元小学校の先生。

親父に頼まれて世話した。(茨城で農場をやっている)

久保田農場の主任になっていた。

呼ばれて、左翼的な話は何もしないが、座談会を2、3回やった。

岡林キヨ (岡林辰雄氏の夫人)

小布施には、呼ばれて何回か行っている。戦前も戦後も。

・天津教

大磯にいたるとき捕まる。

特高の 更新会と同じものが神奈川にもある。その指導者は元検事正で、ある宗教事件を取り扱った有名な特高であった。

天津教事件～茨城 磯原 右翼の思想事件が起きる

日本の起源は間違っている。北朝が正しい。

私に、天津教のことを聞く。神代文字で書いた文献がある。(歴代の神武天皇以前の天皇がある)

神代文字は本物かと聞くから、江戸時代のあとの方に出来たもの。

大山の神社が神代文字で書かれている。

特高にいろいろと教えたことがある。

大磯で観察されているとき、檀原神宮の外苑を発掘した。自分も行きたいと言ったとき、一緒に行き出して掘り出した。(発掘 京都大学の歴史科の学生と教師)

並べた品物、説明を聞いた。非常に新しい。非常に満足して帰ってきた。

別の意味で、検事正とは、そういう意味で仲がよかった。

・三木清

「革命に対して深い信頼と同情をもっていた」(テル)

ヒューマニズムをもって

○ 1982年7月13日

・上泉秀信

彼とは非常に往復があった。

「都」をやめたのちも、彼の家に行って会って、友人として、執筆以外に結びつきが深かった。商業的要素のない文化人だった。

・戦後の自由大学

戦前の自由大学と戦前の自由大学のちがい

戦前～党がやったんではない。上田地方の進歩的な農民・労働者の中にインテリが多かった。

党組織のつくられる基盤となった。

戦後～党がやった。(党組織が自由大学の計画を立て運営をした)

党が自由大学を運営するにあたっては、統一戦線組織の基礎にする必要がある、とい

う考え方であった。

「講師は統一戦線の目的に合う人を選ぶ必要がある」とした。

平野、大内君が来た。そういうような話をした。

やった内部の聴講者のなかでは、大内のは評判はよくなかった。何というか講演会という感じだった。

野坂参三と話し合っただけ。

～自由大学に対して興味をもってた。ソビエトにも中国にも、こういうものはない。

かれの了解のもとに自由大学をやった。

小岩井滋水

塩尻。上田紬を織っている人で、長い間結核で、細君と結核病棟で知り合う。

農民ですが、これくらい誠実な人はないと、私は思っている。まともに仕事をしてくれた。

みんなの信頼が厚く、組織をしている。現在も生存されている。戦後は党员である。

戦前の自由大学が成立して続けるときに、一番影響を与えた地域は塩尻村だったようだ。

高遠（熊）の兄（虎之助）

最高の指導者。もっともすぐれた党员だった。これを中心とした塩尻の一団が党組織の中心となる。

上田の統一戦線の重要な役わりを果たす。

中島幸爾（村長を党が生まれた最初か2番目）

小宮山量平

うなぎ屋に養子にきた。

戦後、自由大学に関係するようになった。

大学出の人が参加したわずかの例の1人であった。

指導力を発揮したし、党の地区委員であった。

鵜飼君がいて、上田の党組織の重要な役割を果たしたが、小宮山君は組織に関係して自由大学にも関わった。

千曲文化クラブ～彼がつくって、指導していた。党员が大部分であった。

山越完吾

前から自由大学をやっていた人とは空気が違っていた。それほど中心的な感じではない。

娘さんの養子になった。（太郎氏と同じ年に生まれた？）

党员ではなかった。

富岡隆

党员。上田に鐘通があつて、それを専売公社にするということで、ストをしたとき、委員長となった。一時、警察に留置されたりしていた。

覚えはないが、聴講程度。

一番指導力を発揮したのは小宮山量平と塩尻の連中。

山越、金井正

～大きな役割を果たした。みんなの中で理論的に断然高い。

ドイツ語の著書を買っていた。常楽寺へ売る。売る中には自由大学にお金を出すことが含まれていた。

半田孝海に本を買うのを私が仲立ちしたかも知れない。

商業会議所

200～300人のホール。椅子を並べて座れるようにしていた。

1日だけ受けた。平野、大内、羽仁の話聞いた。

大内～聴講生から質問が出ると、大学生のように相手をしていた。

羽仁～質問者の中に西田哲学をふりまわす人がいて、あなた、あまりわかっていない、と羽仁に言われていた。

質問はあった。

聴講者 上田市長、農民、労働者。女性も参加していた。

みんな生活のためもあるが、東京へ出て行くので、自由大学のやり手がいなくなったのではないか。(太郎氏)

戦前に自由大学をやったような、偉い学者の場合と違い、講演会が簡単に聴けるようになった。しぜんと薄れてしまった。新しい時代に合うようなものができなかったためではないか。(タカクラ)

あの時代、共産党ということで、大衆も近づいてきた。

ミスはたくさんあった。経験もない、方針もない、といった状態であった。

自由の中で、混乱があった。

タカクラはいない場合が多かった。

大内、平野については、自分から呼んだ方がいいと言ったと思う。

・大内兵衛

碁会～腐需会 大内が付けた名前

何回か碁を打った。あとで座談会。

法政大学の教授。

何年も続いていた。社会党の人と話し合う。

野坂参三が参院選に立つとき、私が大内のところへ行って、推薦者になってもらいたいと話をした。承知した。野坂は当選した。

・前橋真八郎

戦後の農業経営の代表的な先進分子。村長として村を経営して行く上で、無類の腕を発揮した人。中央公論にも、それ以前に結びついていた。

↓

前橋さんの村、興除村、青森の村を取りあげる。土門拳が写真を撮る。

・森田草平

徳球が、有名な人はいないか、とタカクラに相談したら、森田はどうだと言ったら、それはいい、ということで、入党工作を親父がした。(太郎氏)

ゴゴリの「死せる魂」～英語から森田草平が訳したのを、タカクラは批判していた。

それまで直接会ったことはない。伊那へ入党工作に行ったのがはじめて。

・前進座との関係

翫右衛門、国太郎と戦前からつきあいがあった。とにかく何かのかたちで出入りしていた。

太郎が中学2～3年のころ、新橋演舞場でみる

発声法の訓練に教えに行ったことがある。

戦後 集団入党～徳球が了解

ハNSTがきっかけで前進座の中に共産党に入らなくてはならないのではないかという意見が出る。

徹夜で討論した。長十郎が全部の意見をまとめた。

これが大きな間違いだった。——それを止めるべきだったが、そのままにした。

前進座に迎えられた。演劇の指導をお願いしたいということ。これは失敗であった。役者の言語まで相談に乗らなければならなかった。とてもやりきれるものではない。翫右衛門と長十郎と意見が合わない。翫右衛門と長十郎が不在のときには、本格的な歌舞伎が出来た。

・民族芸能を守る会

会長をずっとしている。

前から党で取りあげなかった芸能に関心を持っていて、その中に、歌舞伎の問題、落語、講談～大衆芸能として育てなくてはいけない。日本の芸能として大切なもの。

歌舞伎～前進座

落語、講談～民族的なものにするにはどうしたらいいか。

新しく組織して発展させたいと思った。

発起人 タカクラ

一番熱心 漫才 大空ヒット、マスミ

先代一流斎貞丈、林家正蔵（彦六）、神田山陽

小生夢坊が入って、本牧亭の女将も参加。

本牧亭で守る会の例会を開く。

一緒の方向をもって芸能を高めていこう。

新しい作品を作れなかった（古典を直していく）。運動ではなくなっている。

岡本文弥、山陽、貞丈～中国へみんなで行った。

○ 1982年8月6日

・高校と高師

セクト的なところがあった。

高師～教師になるための学校。学ぶことよりも教えることが目的。

京大～官僚になりにくい。ツテがない。学者か高校の先生になるか。

あきらめていた。

・中国亡命

追放されてから、三鷹市上連雀に住む。

参院当選の翌日に追放された。

「箱根用水」を書き上げるのに全力をあげる。

～三鷹で書く。

(太郎氏) 26年の何月からか、ちよくちよく見えなくなる。

最後に母親に「いなくなるから」と言い残していなくなる。

ある日、突然帰ってきて、隣に警察のスパイがいる。ちょっと離れたところに双眼鏡で監視していた。そこへ帰ってきて、「外国へ行く」と言っていた。暑いとき（7～8月）。

転々として、準備を整えて、外国へ行ったらしい。

出入国管理令のできる1か月前

26年9月か10月

〈いま秘密にしておくこと〉

一緒に行ったのは「律」。

管理令があつて、出てからだどひっかかるので、ひっかかっているか、他の人はひっかかっていない。

当時、党の中でも人民艦隊のことは知られていた。

中国のある港に着いた。中国が船を調べて捕まえてくれる。いつまで経っても捕まえに来ない。食料がなくなり、弱って、代表の人が向こう（公安部）に訴えて、捕まえてもらった。聴波が迎えに来た。

*注、当時、タカクラは、伊藤律と一緒に中国に行ったことは「秘密にしておくこと」と断って話をされたが、その後、渡部富哉監修『生還者の証言－伊藤律書簡集－』（五月書房、1999年）で伊藤律が中国へ亡命した際、タカクラ・土橋一吉が同行したことを公表されているので、この記録でも公開することにした。

北京機関

徳球、ぬやま、聴波、高倉、伊藤、野坂、土橋（中央委員でなかった）

大事な会議は5人でやった。

国際共産党の協定で、他国で一国の活動をしてはならない。

中国では中国共産党の一部にならなくては。勝手にやってはいけない。それを侵せば退去を命ぜられる。

重要な会議では、中共の政治局員または中央委員が参加。

行った目的～共産主義の学習のために行く。そのための援助を受ける。

当時の中国はソ連とべったりであった。

自由放送～中国の指導にもとづく。夜の遅い時間に放送。

原稿 徳球、野坂、律、ぬやま、高倉で5人で書いた。

中国旅行

中国を旅行したければ、という話があった。

1955.11.8～1956.4. 末

メーデーに間に合うように帰ってくる。

私の方の要求～中国の党生活を見て、予想できなかった点がたくさんあった。権力を取った党を知らない。思想的・理論的な教育を党員及び大衆にやっているか。

反戦兵士のことがわかって、調べた。 →西園寺と一緒に行った。

（「日中友好新聞」1220号）

軍事問題を調べた。

武漢の大洪水～どう整理するか、ということを見に行った。

周恩来が行くのを許してくれた。

党学校

学習した。共産党の軍事問題が中心。

スターリンの時代であったから、スターリンの方針として、共産党として特別重要なのは軍事問題である。いまおろそかにしておくと、大事な革命段階にくると破綻する。

中国にいる日本人に教育する義務があった。

（日本人学校）校長～軍事のための軍事学校であった。

そのために一番大切なのはマルクス・レーニン主義だ。理論的にも高いものを教育しなくてはならない。

生徒数 約 1000 人～大部分は中国にいて中国革命で役割を果たした人が多い

+ 15～6人の幹部（日本から来た）

スターリン～中国も賛成して、日本人学校が出来た。

志田重男と律 仲は大変悪い
連絡をとって、律をどうするか 徳球に外される

帰るのが遅れたのは、党内の事情
帰る前、中央委候補 中央委が開かれて中央委員になる
党の方から帰れという指示があり、中国の党を通じて連絡。

北京機関

徳球、野坂、律 —— その下に 高倉、ぬやま
～ぬやまとは非常によかった。反伊藤ということで結びついていた。
ぬやま～伊藤と一番仲が悪かった。
思想的には純粹。女性をもてあそぶのはもつてのほかだという考え方を持っていた。
理論的に勉強しない。感情的に動く。(宮本がきらい)

(太郎氏) スターリン

戦時中の高倉の論文を集めさせて読んでいた。とくに国語・国字の問題。

国際的な変化を考えると、わからないことがたくさんある。

例 中国の党と日本の党
日本の党とスターリンとの関係と変化

○ 1982 年 10 月 26 日

・マル

マルから手紙が来た事実はないです。マルの研究はしていたが。
～大島義夫が中心となって、それに黒滝チカラも参加していた。
高輪署に捕まったころ。
だんだんマルクス主義の理論を勉強していくうちに、言語学を中心に大島義夫、黒滝チカラなどの連中と勉強。
言語学 マルクス主義の影響はほとんど出てこない。
そこへマルが出てきた 飛びついて、大島が中心になって一緒に勉強した。

・築地小劇場 新劇等との関係

左翼でしたから、したがってすぐ関係ができた。
丸山定夫が非常に親しかった。その関係でつながっていく。
そんなに関係は深くない —— 文化の左翼たち(党員、党員でなくても)
私の場合、新劇と関係していても、農民・労働者、あるいは言語 いろいろ雑然と関係がある

丸山定夫との関係

東京に出て来たとき、あのとき浅草にいたんだなあ、丸山は。なにしろあのとき 2 人の文化人と特別の関係ができる。
向こうから寄ってきて結びついた文化人 —— 丸山定夫と柳瀬正夢
丸山～東京に出て来て間もなく。
左翼劇場ではなく、その前に入っていた新宿でやっていた劇場に招待されて会ったことがある。
普通の左翼ではない、もっと幅の広い点をもっていた。その点で結びついたのではないか。

柳瀬～画集を作るときなど相談に来た。

絵を描く上で労働者・農民の絵を描いている。労働者・農民を知っている知っている文化人は少なかったのではないか。

2人とも本当の芸術家だったという感じがしている。才能があって、そのうえに理論が入ってきた人たちだった。

移動劇団

昭和18年 当時のお許しの出た新劇団（移動劇団）が朝鮮に行った。

満洲の国境まで行ける

むこうの状態を知りたいと思い、戦争の終わりのころの前線を見たい

1年検挙され転向した人～木村太郎（ガラスのコップ ガラスをバリバリ食べる役者）

みんなが見てもつまらないものを公演

俳優の言葉を直していた。

多々良純～山城国一揆を公演したとき、先生に発音を教わったと言っていた（太郎氏）。

日本語の発声法をほとんど知らない。どれがいい発声か原則がない。

→京都にいて、新村先生から教わった宝であった。日本語に対する新村理論を応用したのは私だけではないか。

木下順二～私のところへ聞きに来た。 そのあと山本安英と結びつくのは。

長谷川一夫と山田五十鈴の美男美女

山本安英と2人で観に行ったときがある。私が大磯にいたとき。

山田五十鈴～「箱根用水」をやりたい、と言ってきて、やることになる。

（下元勤と同棲していたとき）

あれほどの素顔、声、素質、情熱（芸への）をもった人はいないのではないか。

五十鈴の父

山田九州男～新派の女形。

京都座で初めて見た。「なさぬ仲」（大阪朝日に連載）を公演、大当たりした。

私が京大を出て、囑託をしていたとき。島文次郎教授のところへ行った。

島文次郎～演劇の方の専門家。

竹林男三郎（臀肉切り取り事件） 1906年9月死刑を宣告される

妹野口曾恵～男三郎と結婚して子を産む 野口家ではライ病の伝統がある

野口寧斎（漢詩人）の弟

京都座で「なさぬ仲」の新派の招待券をくれた。

招待券を持っていったら、楽屋の方から挨拶に来た。

座頭～福井もへい 足がびっこの人 壮士芝居の残り

初日に行ったら、「なさぬ仲」を脚色したもの。そのとき女形をやったのが山田九州男。

→新聞小説をやって当たった最初。

・森鷗外

森鷗外に私淑した。

鷗外の本を中学時代から読んでいた。

中学時代 「吾輩は猫である」「坊ちゃん」「草枕」を愛読していた。

漱石、藤村、白鳥、鷗外

白鳥～中学4年のころに愛読した

鷗外～翻訳物。「青年」（明治43年）（漱石の三四郎に対抗）

自然主義というものを知った。

京都が舞台になっている →三高を受ける原因にもなった。

(「風流巖法」) 叡山の生活と舞妓が出てくる

・三高時代

鷗外、漱石、外国のものはよく読んだ

イプセン、ベルグソン、ダヌンチオなどほとんど全部読んだ

ストリンドベリーなどは崇拜してよく読んだ

鷗外、漱石、独歩、白鳥はよく読んだ

田山花袋は面白くなかった。藤村も好きでなかった。

鷗外とは文通があった。荷風の手紙がある。

当時、ダヌンチオが好きだった。

鷗外の影響は私の全作品に残っていますよ。

漱石、藤村はほとんどない。

あとに影響があるのは荷風。

ヨーロッパの近代文学を一番知っているのは鷗外である。

その本質的なものをつかんでいる。他の作家は影響を受けているものの、その本質をつかんでいない。

そういう意味で鷗外を信頼している。

鷗外の最も崇拜者が荷風であった。

ヨーロッパの進歩的、新しい文学を日本の作家たちは知っていない。彼ら(鷗外、荷風)は知っていると思っていた、当時は。

・戯曲

戯曲から出発したのは、イプセン、ストリンドベリー、チェホフなどの戯曲を愛読。

アイルランドの劇を愛読するのもそこからきている。(卒論…アイルランドの劇)

劇に興味を持っていた。

チェホフからロシア文学へ行くことになる。

・「人民文学」について

江馬修、豊田正子などと編集会議を開いたことがある。

(太郎氏)

一緒に何時もお供していたが、江馬などと気が合うわけでもなかった。

父は徳球派であったから、しぜん「人民文学」の方へ行ったが、とくに原因があるわけではない。

「新日本文学」に出てくる小説も、また「人民文学」に出てくる小説も、あまり高く評価していなかった。

野間君～党を除名される。大部説得したが、ダメだった。

・「民主文学」

会費は払っているが、ほとんど関係していない。向こうも煙たがっているようだ。

はじめからある党の弱み

あるセクト的の弱みがある

日本のインテリ階級の特殊性

ヨーロッパの場合～インテリの言葉はふつうの大衆が使っている言葉で書いている

日本の場合～インテリの言葉 大衆が使っていない言葉で書いている

インテリの思想、インテリのもつセクト性、その歴史的・社会的根源とかかわる

・タカクラ作「さんしょう太夫」

1. 階級的な要素

2. 民族的な要素 2つの原則

共産主義的な分析のうえに、この素材、語り、すじ（内容）

語り物～民族的な

内容～日本歴史の発展の重要な場面

日本人の中には日本の歴史を知りたいという要求がかくれている（無意識的に）

日本史的にとりあげる → 感覚的にふれる

だれもが取りあげてきていないけれども

・民族芸能のこと

「守る会」をつくる時、こういうものをだれもみていない

民族性、階級性を育てないといけないと思い、（党の文化部）党の意見で私が会長になってつくった。

落語、講談、漫才を中心に、その芸人もその中に入れる。芸人が主になる。

講談— 竜斎貞丈（先代）、神田山陽

落語— 林家正蔵（彦六）

漫才— 大空ヒット・マスミ

こんな連中に、その他の入れて、組織した。この人たちも私が話をして入れた。本牧亭の女将さんも入れた。そして本牧亭を中心にこさえた。

手をつけていないところだし、落語、講談などはそのまま放っておいてははいけない。党の指導が必要である。この人たちを組織したのは成功だった。

私の思うようにはいかなかった。

形式的には続いているが、本質的には発展していない。

みんなが、これが発展することの社会的、文化的意義があることを深く考えていない。

しかし、新しい時代が来た。（いま私たちのまわりに）

いまとくにきたのは、古い時代の芸能人（古い形を頑なに守っていた人たちが次々に死んで、古い形で守れなくなってきた。例；林家彦六）

つまり、下町の芸能を頑なに守る

下町の芸能～内容としては吉原中心

形式としては下町言葉を厳格に守る

これまでこの原則を守ることが条件で入門したものでないと弟子にとらない

そういう師匠が次々に死んでいった。（彦六の死を最後に消えて行くだろう）。

いまそういう歴史的條件が生まれている。

大阪に新しい動きが出てきている。

しゃべくり落語（早口でしゃべりまくる）

→大阪が続かなくなっているところに、桂米朝の新しい落語が出てきている

朝鮮に生まれ、年を取ってから落語をやって、しゃべくり落語ができない。大学出のインテリ。

この2つが合わさって、いま日本の大衆芸能を新しく発展させようとしているし、そういう歴史的條件ができています。

米朝の2冊の作品集～これは非常に読みにくい。しかし、新しく出た「全集」は変わっている。

大阪と東京にある違いが統一され、民族的な大衆芸能が育っていく基盤ができるのではないかと。

それを阻んできた封建的なセクト性

言葉のセクト性、文化のセクト性

これを非常に大切にしなければならない
まったく新しい、誰にもわかる、いままでにないユーモアをもった作品をつくる必要がある。

日本の社会に残っている封建的セクト性がいかに根深いか、その最も具体的なことば
地方は、身分層的に分裂されている
単語から、その他の言語要素が違う
→民族芸能の問題もこれに関係する

林家彦六

↓↑

古今亭今助との対立（下町言葉が話せない、ばあさんの話をするようになった）
～タカクラの作品を上演した。

- ・「お」を「を」に直したのは、まだあまりにも早すぎたと考えて。
正しいと思ったからといって、やれない部分がある。

○ 1983 年 9 月 20 日

- ・日本の農業の特色
欧米の人に話すと～水の農業をもっていない
→水利権の説明におどろいていた
- ・小崎政房
新宿にあった「空気座」の監督。
堺俊二のいた劇団の獲得をしていた。テルのものはやらなかったが。
小さな移動劇団があって、ムーラン・ルージュのあとぐらいに出来た。
「大原幽学」の脚本
坂田山で大原幽学のリハーサルをやった。
昭和 15～16 年頃に知り合う。
- ・新村出
大阪の NHK ラジオで、新村出が「ニッポン語」をほめた。（出版直後）
京都大学の言語学会
新村さんの信頼するような弟子が出てこなかったのも、私が特別に職を探してくれて、かわいがられた。
京大をやめることに反対していた。新村さんが外国に行っている間に信州に行ってしまった。
- ・吉田家
巴、簾子（きよこ）～通武（美弥の兄）の子
巴～岸本巴 名古屋在住 古い写真あり
通信～宇和島で眼科、尾崎家へ
- ・小谷家
父が高倉家の養子にいて高倉家を名乗った。

吉田、尾崎～東京の済世学舎に入学している。

輝房～高知の医学校に行っていた。
柳吉（輝房の兄）～財産を独り占めにして、弟に分けてあげなかった。

輝房は、高倉家の財産、これは小谷家の財産と分けていたが、それを取ってしまった。
小谷献吉（輝房の父）～死ぬ3日前に遺言。輝房は田畑を少しもらう。
このため輝房は医学校を途中で止めざるを得なくなった。限地開業だけが許された。
鶴来島で開業、最後は脚気で死亡。そのとき美弥は七郷村にいた。

輝房 1865.1.29 生 1921.9.19 死 62歳

いい人で、のんきな人。つねに義太夫が好きで、口ずさんでいた。こだわりのない人。
芝居好き。小谷献吉に駕籠がある。

駕籠で患者のところへ行った。村に芝居小屋がたつと、駕籠を貸した。

・テル

1つ年をごまかして7つで小学校へ入った。
高等小学校2年行って、宇和島中学へ（5年間）。
高等小学校～入野。1里半。海岸を素足で歩く。

[太郎氏のメモ]

輝房 高知の医学校中退（限地開業）

小倉、後藤寺のそばの位井金村イノヒラで巡查をしていたので、テルも半年ばかり、その小学校へ通った。輝房は上司とけんかして（？）やめる。それから、帰って、七郷村の役場に勤め、のちに助役にもなっていた。輝房は幡多郡鶴来島で限地開業をしていて、脚気衝心で死亡。みやはそこに居合わせなかった。

・小学校

級長をやった。
高等小学校 副級長をやった。

・宇和島中学

5年間。級長になったことはない。三高を受ける仲間に入ただけでも、割合上の方（4～5番）であった。
岡山の医学校受けると親戚から言われた。
芦花の「思い出の記」に影響を受けているときで、岡山の医専に願書を出した一方で、三高を受験した。

・三高

三高で哲学をやる —— 哲学というのは、藤村操が中学に入ったときに自殺して、人生の本質を勉強するには哲学を勉強しようと思った。
三高に入って、ヘーゲル、カントを一所懸命読んだ。しかし、つまらないと思った。
どうも人生問題は哲学で片づくものものではないということに気づきはじめた。
高校1年の3学期 厨川の文学論の課外の講義
「近代文学論」（『近代文学十講』）という講義を3学期に受けて、文学の方に近づく。
近代文学の思想的背景を知った。

・通武と輝房

一緒に自由民権運動をやった。
床の間に掛け軸～板垣退助、星亨、松田正久の肖像
テル～「将来は代議士になる」と言っていた。親父たちの政治的な意識、影響を受けた。

・中学校

愛読書 「思い出の記」、「子猫」「不如帰」「八犬伝」「弓張月」「金色夜叉」
カッケンブスの「世界史」～キャプテン・クックの日記を英文で中学4年のときに読んで、組で英語が一番できるようになった。

・小学校

高等小学校のとき腹痛を患い、親戚が全部集まって相談した。(跡取りが急病で)
何もわからなくて、何日か寝た。

小学校1年のときに習った歌

楠公の歌、「箱根山」

～意味が分からなかった。

「すうぎの並木」「こけなめらか」

土佐では「こけ」は「アカ」のこと

・中学校時代

女工ー結核 「不如帰」

個人的な同情 自分の近いものが悲惨になっていることへ

・碁

東京に出てきて、大内兵衛、三木清と会って、やった。(3人で)

碁・将棋・テニス～長野の人と結びつく大きな役わりをした。とくに小学校の先生と結びつく上で。

テニス～小学校でテニスをもっていった。中学校時代からやっていたが、長野に行ってから、別所にテニスコートがあって、うまくなった。

スキー～軽井沢でやった。

(太郎氏)

在学中、湘南中学にコーチとしてやって来た。

一番困ったのは、ゴールの寸前で抜かれた。なぜラストスパートをかけなかったと怒られた。

あの頃はこわかった。

山登り、水泳も得意だった。

○ 1983年10月24日

・高校時代

三高に入ったとき、哲学を研究すること。

人生問題を解決するためには哲学を研究すること。

厨川(1年のとき)の話聞いて、文学が深くタッチしていることを知り、文科に行くことを決心する。

ロシア文学、自然主義文学(フランス)のもつ深さ → 哲学では解決つかない要素を持っている

ロシア文学に集中するようになる。

・京大

京都大学にはロシア文学がなかったので、英文科へ

東大に行かないで京大に行ったのは、

東大～何となく官僚的(官僚をつくる大学)

京大～もう少し近代的な要素を持っていた。

東大では文学で鎌倉以降はやらない。京大は近世もやっている。

藤井乙男さん 「近松」を3年間教わった。教わったのは具体的であった。

とくに新村さんとの関係でロシア文学科を京大につくる計画をもって、私を大学に残そうとした。新村さんが外国にいる間に長野へ行く。

学問から創作へ

創作よりも社会運動が重要になったり、変化がいくつもある。

・大逆事件

三高の3年のとき。

幸徳を少しもわるいやつとは思っていなかった。犠牲者だと思っていた。(子どものときに一緒に遊んでいた。)

テルの母～幸徳の母親に教育を受けている。

政治的なものに関心を持つのはずっとあとであった。

政治的な問題は低い問題で、人生問題が深い問題であったという認識があった。

長野へ行って、長野の農民・労働者に接するようになって、だんだんと変わって、社会運動に関心が強まっていく。

人生問題についてはゆっくり変わっていった。

・米騒動

四条大橋のそばの橋の架け替えの渡り初めの前に、民衆が勝手にわたっていった。

形式とはこういうふうにして壊される。

騒動の意義などについてはわかっていなかった。

官僚主義については好意をもっていなかったが、影響は受けた。(大衆運動はどういう役割をもつのかという疑問はもった。)

河上肇さんとは近しかったけれど、社会問題について河上さんの影響を受けたことはない。

「貧乏物語」「社会問題研究」～多少は読んでいたが、熱心には読んでいなかった。ですから理解はしていなかった。

・関東大震災

長野にいた。浅間を見ていた。

上田に越すことになる。上田で生活をして、上田に腰をすえる —— これが私の生涯を変えた天災地変が起きたというくらいの見方しかなかった。

・有島武郎の死

こちらの方がショックだった。

心中～「醜い」と思った。

女房は養女にもられる話があった。

インテリの弱さ(悪い意味での)。真剣に本物にぶつかっていかない。甘えに反感をもった。

金持ちの遊び、適宜的なものの見方 階級的な意味でなく、反感をもった。

・芥川の死

有島のは僕自身の意識した敗北ではない。かれの場合は意識した敗北。ここに大きな違いがある。

芥川とは会ったことはない。意識はしていた(菊池をさかいにして)。手紙のやり取りもない。

芥川は少しずつジャーナリズムに出ていったが、

久米、芥川、菊池、松岡 この中では芥川のが一番あると思っていた。

菊池は粗野で、文学としてはあらっぽくて困ると思っていた。

久米、松岡は書いたものを見ても、能力はないと思っていた。

ただし、生活の根がないと感じていた。

・菊池寛

仲が良かった。学校でも、学校以外も会って、話をしたことがある。当たり前の同級生で、ただ薄汚いところがあった。

ジャーナリストになると言っていた。

長野に行く前に、改造社、女性、3つほどあった。約束していたが、みな断ってきた。

・明治天皇の死

やっぱり大きな事件だった。重体になったとき、国中が暗くなった。大きな声を出すことも失礼のように思われた。シリアスな感じで受けとめた。

・大正天皇の死

天皇はバカだと相場が決まっていた。

葉山のところでいなくなった事件なども伝わっていた。

百姓の家で飯を食べていた。

↓

「権威」に対する見方がだんだんわかっていくキッカケになった。

・第一次世界大戦

社会問題に関心を持ったきっかけ —— 戦争

出征した人が戦死している。他人事でなくなってくる。

歴史の法則で行われているという感じをもっていた。

・末川博

私より2、3年後。

文芸講演会を一緒にやったりした。

三高時代～大学から講師を呼んで講演会をやる。学生の幹事の中に末川や滝川幸辰もいた。

末川～大学教授になってからも訪ねたこともある。

滝川～滝川の部屋と近かったが、行き来はあまりなかった。

・満州事変

仲間が出征する。ここで大きな影響を受ける。

長野で1人出征して送っていった（農民組合員）。

山村良平～オレは日本軍国主義のために闘いに行くのである。

オレは日本帝国主義と闘うために行く。

どこで戦死したという記憶もない。南方。

私は彼と一番結びついていた。

・日中戦争

坂田山。

特に感慨はない。

・太平洋戦争

いつもじいとして驚かなかった。

戦争になると色々な被害が出てくる。

警視庁脱走

戦争は長く続かない。日本は不利だ。

→出て、仕事をしよう。

かなり勝っているときも、日本が勝つとはいっぺんも思ったことはない。

「勝つわけがない」という直感みたいなものがあった。

豊多摩刑務所

巢鴨にいたのを中野の2階に移された。(終戦と同時に)

ノミだらけの部屋。もぞもぞするので、ノミがぞろぞろ集まってくる。

同室した人～古い労働者出身の党员であった。

西園寺～巢鴨から一緒

刑務所の作業～文章を写したり、うんとやらされた。望んでやったこともある。やると食事が一級上がる(おかずが少しよくなる、飯も少しふえる)。

・共産党

1945年12月の党会議には私も出た。

正式には私は入っていない、徳球は入っていると言うが。

最高幹部と何度も会っていたが。

・中国の9年間のその前と後とのちがい

中国、ソビエト、チェコ 生活するうちに受けた教育、とくに中国で受けた影響

↓

私の生涯では特別なものがある。

社会主義とはこういうものだ、そういうことを具体的に感じた。

社会主義～人間を育てる。まともな人間にするということを感じた。

人間がどう変わるか、直接これを見てきた。

人間の親切さを具体的に感じた。

例 延安からの帰りに、雨が降ったとき、車がすべって上がれない。立ち往生していたら、1時間から2時間すると、棒をもって百姓が何人もやって来て、車を上まで引き上げてくれた。

チェコ～帰ることが決まったとき、ソビエトからチェコに行き、帰る。

タシケント会議(AA作家会議)

日本と私も入って代表団の一員となる。

発言はしなかったー日本の事情は知らないで。知っている人が発言すべきだと考えて。

・民族芸能

日本の文化がすべて西洋文化の模倣。

かつては中国文化。現在は西洋文化の模倣。

日本文化を独特のものを作りあげる努力少ない。日本独特のものと国際共通のものとを育てないと。日本の文化の発展に障害となる。(労働者の立場から)

言語学をやったのが大変役に立っている。(新村さんの影響)

・松坂忠則～戦争中から国語運動で一緒にやった仲間。

大久保忠利～2、3年前、手紙と書いたものをもらったことがある。

・表音文字

「ゆう」など

やっておいてよかったと思う。

現在、ひとり孤立してはいけない、と思って、やめました。

・「ぶたの歌」

中国では大事にしてくれた。

中国ではローマ字をするさいの重要な素材となった。(周恩来)

・中国

旅行するとき駅に行く。一緒にたくさんの人が待っている。そこに2～3時間待っている。そこで勉強している。

貧乏で子どもがいるので、家では勉強できないので、駅で勉強している。マルクス主義のむずかしい本を読んでいる。(『何をなすべきか』、毛沢東)

社会主義建設にはこういう教育があるのかと思った。

・金井正

大きな見通しを持っていた人だし、理論も持っていた。

私生活が、しかし苦しい。

細君(病人)～芸者を買に行けと言われていた。

インテリの悲劇を体現した典型的な人ではないか。

彼がいなければ自由大学はすすめなかった。

かれの悩みには深いものがあった。

○1984年7月17日

・戦後の上田自由大学について

憲法にどれだけの関心をもっていたか(自由大学の会員が)

(また、講師の人たちが)

どの程度、現実化したか。

いまの印象からすると、どちらも否定的である。関心はあったかも知れないが、取り組むような姿勢はなかった。自由大学としての関心はなかった。

(太郎氏) 平野、大内、羽仁の3人の講座を聴いた。

平野～憲法というより世界情勢として世界労連(ルイ・サイアン 書記長)の結成について話をした。

共産党はあの憲法には反対だったから、とくに触れなかったと思う。

党～賃金闘争一本槍で、上田などに集まっていた党自身が、それほど意義を認めていなかった。

10月1日、刑務所から出る。

大磯の焼け跡へ帰る。

金目村の医者(の離れ)を借りて、GHQに、日本を真に民主化するにはどうするかという論文を書き、GHQに持ち込む。

11月8日 国分寺の自立会館

共産党の党大会準備会に出る。 →それから別所へ行く。党の再建。

頭の中には再建しようという考えはあった。

(以下、太郎氏)

柏屋別荘に前の関係者が集まってきて、再建の話が出たのだと思う。

M. サイアンの話(を父が)した。

鵜飼、小宮山、堀～運営の中心になっている。

鵜飼長寿～地区委員、のち中央委員、外国(プラハ)に派遣されて帰国して死亡。

疎開してきていた

堀道明～上田の地区委員になって、上田の地区委員長のときには書籍をきちんと整理してい

た。

地区委員の中での自由大学に対する意見は必ずしも一致していなかった。
解放された直後で、方針がメチャクチャ、闘争一本槍で、戦後の自由大学がつぶれる理由にもなる。闘争に役立たないものは重視しないという傾向が強かった。

風早八十二が来たときには、自由大学の権威は落ちていた。(一般の中で)
父が土屋喬雄に手紙を書いたときにも、何の返事も来なかった。

堀、小宮山ら～地区委員の中で大きな発言を持っていた。
自由大学については運営の中心になっていた。
タカクラと相談して講師の人選を行った。
党に近い左翼の人たちを利用しなければならない条件があった。
学者の状況、受け入れる側の聴講生の中にもそういう空気があった。

父が議員に当選して、東京と長野を行ったり来たりして、自由大学の面倒をみる時間的ゆとりがなくなった。

父がタッチしないうちにつぶれてしまった。

(以下、タカクラ)

山田勝次郎～羽仁の親戚。かなり前から農業問題で関係があった。

平野義太郎～直接顔を合わせたのは終戦後。
前山寺の争議のとき、守屋典郎が家に来た。それをすすめたのが平野であった。
運動も一緒にやったし、党との関係で親しくやった。

羽仁五郎～京都大学に講演したとき、高山義三の市長選に絡んで、講師のメンバーの一番最後にタカクラ、その前に羽仁がやることになっていた。「どうか最後にさせてくれないか」と、羽仁が言ったので、「ああいいよ」と言ったという逸話がある。

岩波との関係で、「世界」が送られてきた。タカクラが岩波のあり方に不満を持ち、岩波も雑誌を送ってこなくなる。

羽仁説子とは非常に仲がよかった。河崎なつとの関係もあり、婦人とのつながりがあった。

国府津村に移るとき、家を世話したのが河崎の紹介だった。長女が女学校を受ける。第八高女と神奈川平塚女学校を受け、平塚が通った。→神奈川に移る。

河崎の別荘があった国府津の家を借りた。

ねずまさし～代議士のとき、議員官舎がなく、知人の間を転々とした。

風間道太郎という友人がいて、泊めてもらったことがある。そこへねずまさしが訪ねて来たことがある。父は、それ以前は関係がなかったと思う。文章の上での認識はあったと思うが、父はあまりねずを評価していなかった。(太郎氏)

聴講者の層

農村の農民のインテリ(貧農ではない)

自由大学の中に、経営はインテリでやることについて、貧農から特別な目で見られたことがある。

羽仁五郎などを聞いたとき、質問者の中に哲学用語を使って質問したのがいる。—西田哲学の影響ではないかと思った。

労働者は少なかった。

上田の中小のインテリが多かった。

土地取りあげ闘争～馬場三九郎と一緒に別所の貧農と地主に交渉したこともある。
税金闘争～税務署のあとを追ったりした。此の方がメチャクチャな指導で

富岡隆～聴講生というより話をする方が好きだった。

鐘通の争議で逮捕される。

闘争の模様を逐一報告したのを聞いたことがある。(太郎氏)

内山正弘～鐘通。のち北陸(富山県)へ行った。

党がひきまわした証拠ではないか。

地区委の給料が払えなかった。

大衆団体と党との区別をまったくつけていなかったということはあると思う。(太郎氏)

上田地区委員会

鵜飼～初代委員長 疎開者で地区の運動を始めた

堀道明～2代

雨宮潔～3代 —— 太郎氏が入党したとき(昭23.2) 姉は先に入党していた(東京にいた)
党に入る前に党学校が開かれ、一番勉強になったのが、鵜飼さんの唯物弁証法。そのテキスト(英文)父が持っていた。
労働問題については富岡隆に勉強した。(太郎氏)

毛沢東、周恩来との関係は特別深い。

深町ひろ子～戦後の自由大学についても知っている。

高倉太郎聴き取り記録

○1987年12月23日

・輝房

鵜来島 父輝房死亡

島で一人でなくなる。

美弥～死に目にも会えなかった。そのことが生涯、良心の呵責になっていた。

医者をやっていて、父母仲が冷たかった。

接ぎ木がうまかった。

のんびりしたところがあった。

顔も知らないで結婚した時代で、初夜の終わった後、身体を洗った、潔癖なおばあさんだった(母)。

便所へ行ったら、子どもの頭が出てきた。

昼をひっくり返したら、そこへ飛び出した。おでこをすりむいた。手を開いて生まれた。→この子どもは一生涯お金には縁のない子になると思ったという。

・チフスについて

厨川白村の原稿 チフス菌が付いていて、夏休みに帰ったら、40度の高熱になる。

ひと月熱にうなされながらなおった。
なおったときに家の前で写真を撮った。
↓
当時、自転車が買える。嘱託の時代。

留年

オックスフォードの「シェイクスピア研究」を丸善から買ってきて勉強した。それをもとに質問したら、イギリス人教師に「アイ・ドント・ノウ」と言われた。
→授業をボイコットした。
教師をいかにへこますかという意気込みで勉強した。マンネリズムで指導をやっている教師は軽蔑された。

上田敏の死亡－「芸文」特集号 テルが編集

・輝房の母親

輝房が死んだときに、姿勢を正して、「兄が全部財産を取ってしまったが、私が生き、必ず弟に財産を残してやるように」
兄がほとんどくいつぶしていた
わずかな土地＝畑 ばあさんが野菜を作ったりした。テルも夏休みのときに帰ると、肥やしをかついだりした。

・テルにとっての三つの心棒

文学
言語学
農業～長野県に受け入れられる

・「狼」

母（ツウ）からの話として
再三再四電報が来た。（「アカになるな」という電報）
そこで検閲で都新聞が大打撃を受けるというので、中断をする。
最初の構想は、戦後に出た「狼」とはちがうものであった。（「第一部了」で）

・宮城与徳との出会い

太郎～小4で神奈川に移る。
昭和10年 当時、わが家にはめずらしい高級なチョコレート、子どものおもちゃのオートバイ（アメリカのか？）、モーターボート（黄色をしたスクリューでまわる）、つぎつぎと持ってくる人がいる。その人があとから考えてみると宮城与徳だと思う。
与徳に「いんすきな」と言った。→母から怒られる。
（子どもの間で「いんすき」という言葉がはやっていた。「いんちき」とはほめる言葉で使って。）

あんみつ、あずきアイスを2～3日食べられるのがごちそうであった。
鬼子母神へ子どもたちを連れていってもらったことがある。
途中、おしるこ屋に入った。太郎～食べられないで残した（5銭）
テルはインド言語学の関係で行きたがった。

・移動劇団

朝鮮で、途中で慰安芸者が中心となった劇団に変わる。父（テル）とは顧問の名目で付いていく。張鼓峰が見えるところまで行く。向こうでは赤旗がひらめいている。
朝鮮、満州とで兵隊の給料が違う。→兵士の不満があった。

鴨緑江を渡ってきてスパイが入ってくる。
駐屯地で手錠をかけられた青年たちの姿が堂々としていたのに、感心した。

○ 1997年7月10日

・赤旗日曜版

です、まず調〜タカクラ、小宮山量平の提案が入っている。
「大衆にわかりやすく」というタカクラの理論からきている。

・スターリン

ハンスとしたとき、ソ連大使館の人がカレンダー（スターリンの写真が掲載されている）を持ってくる。

中国に亡命したとき、党学校の校長にするように命令したのはスターリンの命令による。

・蕭々

日本人伊藤克 「箱根風雲録」の訳者。

高倉輝先生

地下にもぐられた先生を慕いつつ、
お目にかかれる日の春も早く訪れるよう。
この拙訳を風見先生にお預けしておきます。
北京にて 訳者

在北京 蕭々 1958.3.6

風見章が中国を訪れたとき、高倉輝に会わせてほしい、と言って

「私の先生だから」

→風見章と会って、渡された。

1960年の安保のデモを見ていたとき、父と伊藤克が話をしているのを見たことがある。